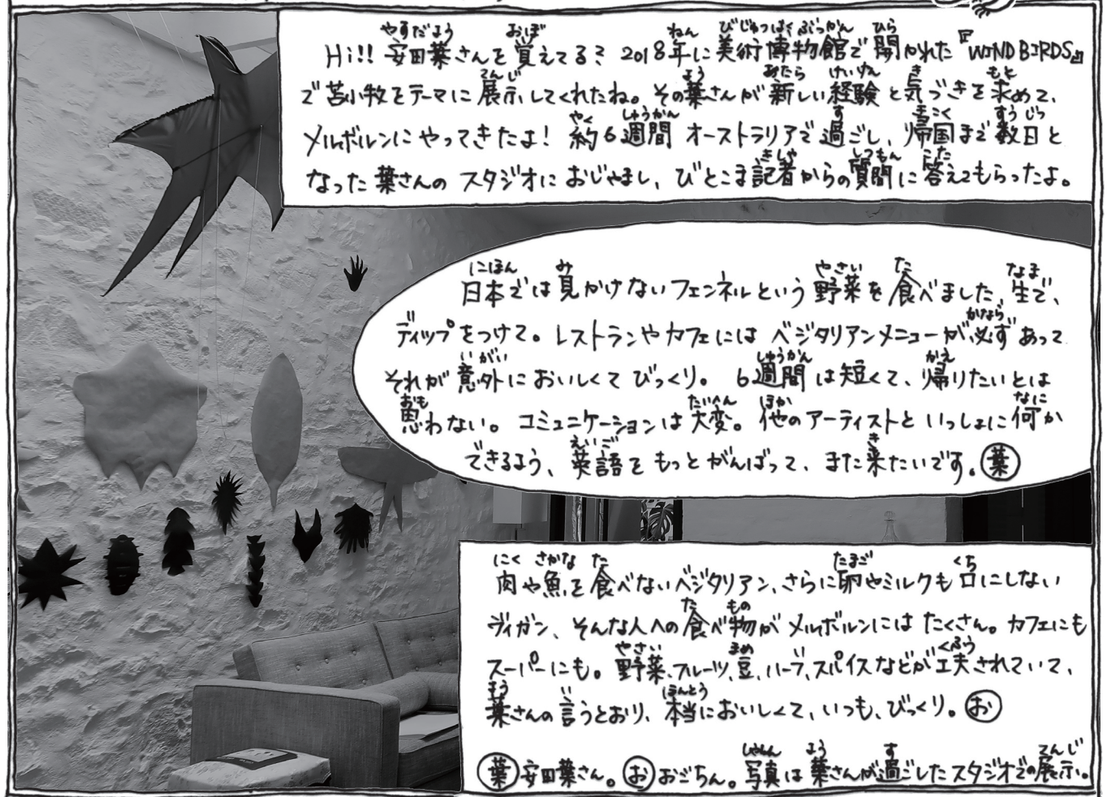
苫小牧からオーストラリアのメルボルンに来て4年目、びとこま元編集長おごちんがお届けする

メルボルンるんだより



Hi!! 安田葉さんを覚えてる？ 2018年に美術博物館で開かれた『WIND BIRDS』で苫小牧をテーマに展示してくれたね。その葉さんが新しい経験と気づきを求めて、メルボルンにやってきたよ！ 約6週間オーストラリアで過ごし、帰国まで数日となった葉さんのスタジオにおじゃまし、びとこま記者からの質問に答えてもらったよ。

日本では見かけないフェンネルという野菜を食べました。生で、ディップをつけて。レストランやカフェにはベジタリアンメニューが必ずあって それが意外においしくてびっくり。6週間は短くて、帰りたいとは思わない。コミュニケーションは大変。他のアーティストといっしょに何かできるよう、英語をもっとがんばって、また来たいです。(葉)

肉や魚を食べないベジタリアン、さらに卵やミルクも口にしないヴィガン、そんな人への食べ物がメルボルンにはたくさん。カフェにもスーパーにも。野菜、フルーツ、豆、ハーブ、スパイスなどが工夫されていて、葉さんの言うとおり、本当においしくて、いつも、びっくり。(お)

(葉)安田葉さん。(お)おごちん。写真は葉さんが過ごしたスタジオでの展示。

毎日毎日、森林火災のニュースに胸が痛みます。逃げる人々、ヤケドしたコアラ。でも、オーストラリアには火事の刺激によって発芽する植物も少なくない。小さな火事をわざとおこして大きな火事をふせぐことも。火事と上手に付き合う文化なのです。

編集後記

びとこまの活動では毎月たくさんの作品、資料を見るのですが、その範囲はとにかく広く、絵画、彫刻、版画、現代美術、デザイン、写真、映像、陶器、歴史資料、郷土資料などなど。これだけのジャンルを全て興味を持って見るのはなかなか難しいと思いきや、今号でも記者たちはいつも興味深く、じっくり展示品を鑑賞しました。じっくり見ながら新鮮な発見が何度も訪れているようで、スラスラと記事を書いたり、イラストを描いたり。何にでも熱心に取り組む姿勢が紙面からも伝わると思います。

びとこま 第27号（2020年2月発行）

【執　　筆】子ども広報部「びとこま」（阿部多香子、岡村百恵、小川さくら、栗本帆夏、小山鈴乃、たのさあや、中村文香、野本遥、原田詢矢、深澤乃愛、三浦百葉、分里心音、綿貫里咲）、NPO法人樽前artyプラス

【イ ラ ス ト】子ども広報部「びとこま」、堀米和克・小河けい（NPO法人樽前artyプラス）

【紙面デザイン】堀米和克（NPO法人樽前artyプラス）

【編　　集】苫小牧市美術博物館、NPO法人樽前artyプラス

【発　　行】苫小牧市美術博物館（苫小牧市末広町3丁目9－7）

苫小牧市美術博物館の魅力を伝える

びとこま

2020 27号

特別展 第一洋食店と苫小牧の100年

2019年7月13日～9月16日

第一洋食店の歴史

100年の歴史をもつ第一洋食店。初代店主の山下十治郎は、明治17(1884)年山梨県東山郡平等村に生まれた。横浜に出た十治郎は、当時日本最大の規模を誇った横浜グランドホテルで洋食の修行をしていたそうだ。その後、北海道に渡って札幌で豊平館に勤め、料理人としてうでをふるっていった。第一洋食店に代々伝わる「ミートコロッケ」は、横浜修行時代に十治郎が習得した西洋料理の一つ。やわらかくにた牛肉とロースハムを細かく刻み、肉のに汁に小麦粉を加えて作るブルーテソースを合わせ、衣をつけて揚げたものだ。興味のある人はぜひ行ってみてはどうだろうか。

(岡村 百恵)

第一洋食店　イラスト：岡村 百恵

第一洋食店の魅力にせまる！

～家族三代が守った歴史ある洋食店の話～

150年前、明治になり、西洋の知識が取り入れられていったころ。第一洋食店の初代山下氏は、横浜で修行しており、西洋の料理を多く覚える。その後北の大地、「北海道」へわたる。王子製紙の工場の料理人をつとめ、その後大正8(1919)年に洋食店を開いたものの、コイノボリ大火で焼失。それでもめげず、今の「第一洋食店」を開く。王子製紙のえらい人に、他の名にしろと責められたとか。ここのコロッケは特別である。このコロッケは日本でも希しょうで、身近にこのコロッケがあるのはおどろきだ。

時は過ぎ、次男の山下正氏が、二代目として、後をついだ。90才を越えて生きた人だ。有名な歌人とも会い、学んだとか。この正氏、有名な作家が本州からそかいしてきたことを聞きつけ、それから友好関係を深めていった。亡くなるまで仲が良く、年賀状のやりとりもしていたという。このようなケースは珍しかった。

もう一つ。正に集まってゆくものがあった。民芸の焼き物である。中には有名な人の焼き物もあったとか。

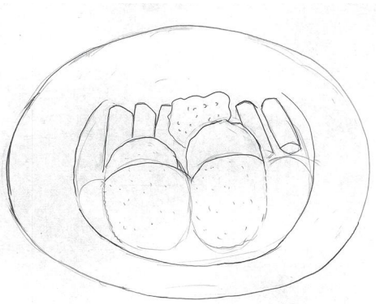
それから三代目、明となる。これからも、第一洋食店は、100年という節目から新たに、歴史の数々に名を刻んでゆくだろう。

(原田 詢矢)

伝統のミートコロッケ

有名なのが、ミートコロッケである。中に牛肉とロースハムを入れている。他は、ビーフシチューやカレーなどのメニューを出している。

(綿貫 里咲)



イラスト：岡村 百恵

普通のコロッケは中身がイモなんですが、ミートコロッケは、肉を細かく刻んだものです。肉を刻んだコロッケは、第一洋食店と東京にある一店ぽだけがわかっているそうです。（へぇ～！！）次に、メニューにあるレシピです。その中のレシピで、一番気になったのは、肉レシピのフィレード・ブーフ・ロッシーニです。（外国人の名のようですね…？）あともう一つ気になったのは、コンソメオルティネールです。具はなにもないですが、見た目だけで味が伝わってきます！！

(中村 文香)

第一洋食店 親子3代ものがたり

1代目山下十治郎…山梨県生まれ。当時1番大きい「よこはまグランドホテル」でシェフとして働いていた。今から110年前北海道さっぽろにきた。そして苫小牧にきた。王子くらぶのシェフになった。

100年前(大正8年)独立。第一洋食店を開くが、開店2年目に「コイノボリ大火」でもえてなくなってしまった。しかしあきらめず建てなおした。

十治郎さんは70年前までシェフをし続けた。約30年ほど第一洋食店のシェフをしていた。

(分里 心音)

●山下正…山下十治郎のあとをついだ二代目である。勉強家で、家の中には本の山だったらしい。川上澄生のファンでもあった。そのうち、川上澄生と仲良くなり、年賀状ももらったらしい。

●山下明…山下正のあとをついだ三代目である。音楽関係の仕事をしていたが、やめてシェフになった。

●山下誠一…山下誠一は、あとをついでいない。山下家の長男で、新聞記者をやっていた。

(綿貫 里咲)

年賀状

イラスト：小川 さくら

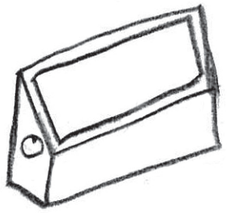
山下十治郎は、横浜グランドホテルのシェフだ。110年くらい前に北海道に来た。苫小牧に来たのは王子製紙ができたころだそうだ。第一洋食店の1けん目はコイノボリの大火事で燃えてなくなってしまった。

第一洋食店でずっとうけつがれているのはミートコロッケだそう。勉強かで、文学が好きな正さんというかたがいた。正さんは川上澄生のファンで作品を集めていた。年賀状も作ってもらっていたそうだ。

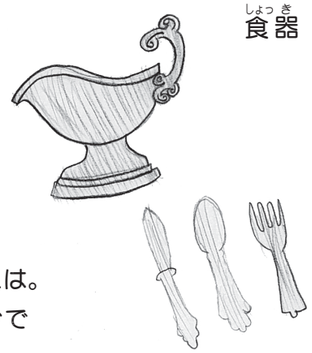
(栗本 帆夏)

お店にあるもの

ニシン鉢



食器



こんなものまであるとは。ニシンは北海道の魚とかでよく聞くが…。

文・イラスト：原田 詢矢

イラスト：分里 心音

●木製テーブル…金具を使わずに組み合わせてつくってある。小さいテーブルなのに4つもいすが置いてあった。

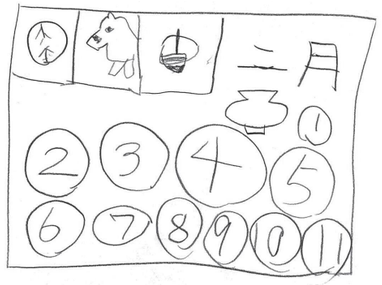
●ラッシ編みのいす…手作業で編んでいると思う。編んであるラッシと木製の物をくみ合わせている。

●木製のいす…昔なのに、職人の力でカーブした形を作ってあった。

(栗本 帆夏)

有名作家の作品

カレンダー　芹沢銈介



カレンダーはせりざわけいすけさんがつくった　文・イラスト：たの さあや

マッチラベル　川上澄生

イラスト：阿部多香子

びとこま記者 2019年8月31日

市長室を出張取材!!

《大地と人》砂田友治 作

勇払を舞たいに描かれていて、ある家族を直線的に描いている。周りの空に少しピンクが混じっているのだが、これは、苫小牧の夕陽がピンクに近いからだと思っている。なぜピンクなのかは、苫小牧はきりが多く発生するからだそう。 **(小川 さくら)**

近くで見ると、ふちはピンクでうすぬりなのに、遠くから見ると、がくのように見えるのが、いんしょうにのこりました。 **(野本 遥)**

《赤い帽子》遠藤ミマン 作

赤いぼうしシリーズは、その名のとおり、絵の中に赤いぼうしがかかれているシリーズである。そのシリーズの作者の遠藤ミマンさんは、苫小牧で有名だという。また、小学校の先生をやったり、苫小牧美術協会の会長をつとめたりしていた。苫小牧に美術館をつくるきっかけとなった人でもある。

(綿貫 里咲)

姉妹都市・日光の絵馬

イラスト：綿貫 里咲

日光から送られてきた絵馬には、ししときくがかかれていた。そのししにはモデルがいる。それは、日光にある「とびこえのしし」だ。かべをとびこえているようにみえることからこの名前がついたが、本当はかべを支えている「支えのしし」で、とびこえているのではないそうだ。

(綿貫 里咲)

《勇払千人同心》本郷新 作

札幌出身の彫刻家で八王子千人同心の「夜泣き梅女の墓の伝説」をモデルで作られている。梅と河西祐助という夫ふがねん土で作られていて、温かみがある。

(小川 さくら)

人の再現度が高い。
舟越さんの職人わざを感じる。

イラスト：原田 詢矢

岩手の彫刻家の舟越さんは、市役所内の、日本では珍しい大理石での彫刻の作品をつくった作家である。

その作品は、「ANNA」といわれるもので、少し笑うという表情から、沢山の人がらが想像できる。活き活きとした、生命感のあるものをつくろうとしたのだろう。王子製紙から送られた像であり、何回か美術博物館に貸し出され、展示されたこともある。細かい所までの人間の再現、素材も上等だ。ここから、舟越さんは素材選びからこだわっていたことが分かる。舟越さんの作品が、病院にもある。

(原田 詢矢)

《ANNA》舟越保武 作

日本は主にねん土や木を使った作品が多いのですが、舟越さんは石を使っていることが多くて、日本では少ないそうです。「ANNA」に使われているのは高価な石で、とてもキラキラしていてきれいでした。みなさんもぜひ見る機会があれば見てみてください。

(岡村 百恵)

イラスト：岡村 百恵

だいりせきでできていてきらきらしている。いろはしろいろ。かおはすこしわらっている。おもったことはいきているようにみえる。つくったどうぐはねんどでつくる。

(たの さあや)

イラスト：たの さあや

少しほほえんでいて、そこに「生命感」を感じた。せん後の日本を代表するちょうこく家だったらしい。

75才で右手が病気になったときも、左手でねん土で彫刻を作っていた。ねん土では、人の顔は細かく作られないけれど、左手だけで作るのはすごいと思った。私だったら、右手が病気になったじてんで、ちょうこくを作るのをやめてしまっていると思う。

(阿部 多香子)

イラスト：野本 遥

大理石でできています。少しほほえんでいるような顔で、白く、きらきら光っていました。75才の時、右手が動かなくなってしまい、そのあとは、ねん土で作品を作りました。そして、89才で亡くなりました。

(野本 遥)

美人で、これ本当に人間が造ったもの！？と思ってしまいました。しかもキラキラしていて、女性のきらめきを表しているようで、気に入ってしまいました。今度私も、彫刻家をやりたいです。

(中村 文香)

びとこま記者紹介②

記事の見方
取材した人▶取材された人
「質問内容」／回答

深澤 乃愛

大谷 明子 記者 ▶ 原田 詢矢さん

①「びとこまを始めた理由は？」

▸学校でポスターを見て、やってみたいなと思ったから。

②「好きな教科は？」➡ 社会と理科。

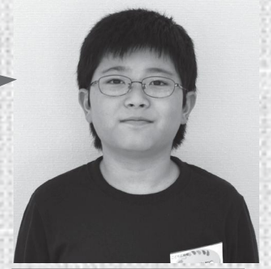
▸内容がおもしろくて、頭に入ってくるから。

堀米 和克 記者 ▶ 深澤 乃愛さん

①「どんなとき幸せですか？」➡
ゼルダの伝説のゲームのむずかしい所をクリアしたとき。

②「行ってみたい星は？」➡
自分で見付けて名前を付けた星に行ってみたい。

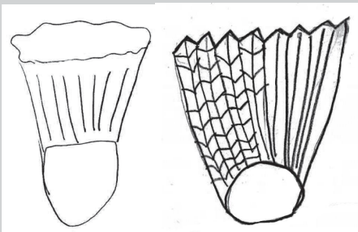
▸緑がいっぱいできれいな水、見たことない動物がたくさんいる星。



原田 詢矢

企画展「NITTAN ART FILE 3：内なる旅 ～モノに宿された記憶」

2019年10月5日～11月24日



イラスト：
（左）中村文香（右）三浦百葉

2015年より隔年で実施している「NITTAN ART FILE」は、「胆振・日高＝日胆地方」ゆかりの現代美術を紹介する展覧会シリーズです。第3弾は、想像力が導くイメージを“内なる旅”として位置づけます。

(分里 心音)

《小かぶのシャトル》小島歌織

バドミントンのはねを使って小島歌織さんは小かぶに見たてている。さきの部分はかぶにみたてていて、上の部分は緑色になっていて、はっぱをイメージして作っていると思われる。

(栗本 帆夏)

《四つの谷の話 -FOUR STORIES OF A VALLEY-》浅井真理子

カリ？とりのようなかたち、にんげんにもみえる。ブルージャケットをきたかりかな？

(たの さあや)

イラスト：たの さあや

「羊は山」「羊毛は、隙間をつくる為に編まれる」意味のわからない言葉がたくさんあるけれど、どくとくの表現で、何度見ても、ちがうおもしろさのある展示です。

(分里 心音)

企画展「浅野武彦の木版画の世界」

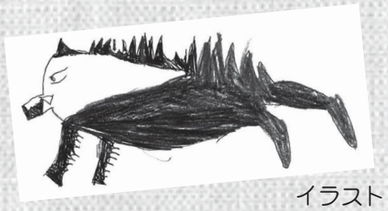
2019年12月7日～2020年1月9日

浅野武彦さんは札幌に生まれ、中学のころに独学で版画を始めました。川上澄生さんと26年間も交流していました。浅野武彦さんはリスが好きで、リスを1ぴきかっていたことがありました。

(分里心音)

私が一番印象に残った作品は『雪原』です。静かな風景にキレイな絵が、私の胸にささりました。

(中村文香)



イラスト：たのさあや

年がじょう いのししのからだがつよそう **(たのさあや)**

私が一番きに入ったのは、『ばら』という作品です。その作品は、花がめだつように、花の白の部分がうき出ていて、うき出ていない部分は、ピンクでした。まわりの葉は、うき出ていなく、紙はきみどりでした。うき出ていた部分は、ひょうめんが、少しキラキラしていました。

来ていたお客さんの中に、お父さんが浅野武彦さんにはんがを習っていたという方がいました。そのお父さんはきようで、てんじされていたちょうこくとうの中の一番太いちょうこくとうを、作ったと思うと話していました。

(野本 遥)

《SUMMIT》小島歌織

小島歌織さんは、苫小牧をイメージしたサミットぶくろを作り、てんじしていた。ジャミーパンをかいたふくろ、「たる前山はいつふん火するの？」とかかれたふくろなどがあった。

(綿貫 里咲)

イラスト：野本 遥

イラスト：綿貫里咲

イラスト：阿部多香子

小島歌織さんが作ったふくろのデザインは、様々で、「苫小牧」や「たるまえ」と書いてあるものもあった。ふくろの中にレシートが入っていたり、宝くじが入っていてとても面白かった。

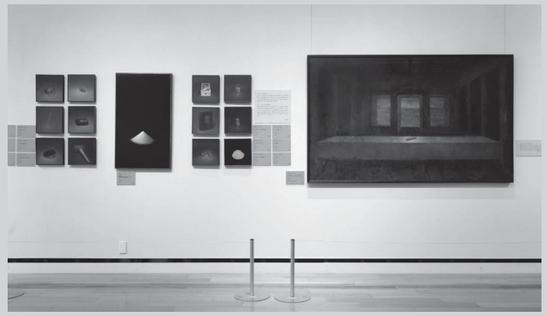
(阿部多香子)

《あの食卓についたのは一番だった》山田啓貴

塩はイエス・キリスト、黒いがま口はユダというようにそれぞれの絵が、イエス・キリストと12人の弟子たちを表す作品がある。

この企画展では、キリストを表す絵を中心に、12枚の絵が並べられている。

キリスト＝塩なのは、塩は、清める、祈るという意味を持っているからだ。

ユダ＝黒いがま口なのは、キリストをうらぎった理由がお金だったから。このように、それぞれに関係するものが、一つ一つ絵に描かれている。

(小川 さくら)